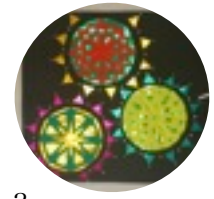


月歩学歩



「げっぼがっぼ」と読んで欲しいが、その意味は、“月日を歩き、学んで歩く”ということ？

特集

「保育者の学び合い ～めいトーク保育 講座2013ご報告～」

【6月29日（土）に、めいトーク保育講座2013を実施しました。「めいトーク保育講座」とは、主に千葉県内の保育関係者を対象とした講座で、保育現場で働く多くの先生方と共に、保育に関わる様々なテーマについて学び合う機会となっています。今年度は「実践に学び、実践で育つ」を大テーマに、幼稚園・保育園に関する「保育の部」と施設に関する「施設の部」の2本立てで展開し、118名が参加され、丸一日かけて学び合いました。】(片川 智子)

2-5P

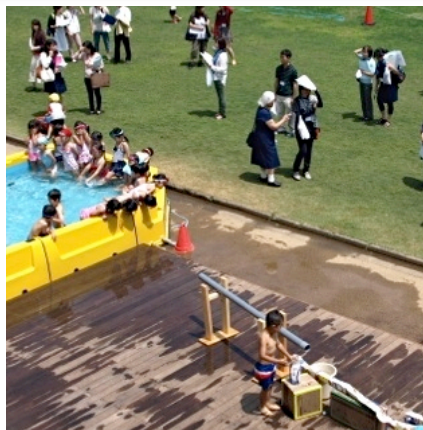
その他の内容

キャンパス・ライフ

- ◆ 教育実習IIを終えて (石井 章仁) 6-9P
- ◆ 保育内容演習 前期最後の光景 9P
- ◆ あそび技能演習 (池谷 潤子・山田 典子・阿部 友理・益子 美土里・深谷 ベルタ) 10-15P
- ◆ 「音楽表現とピアノI」教職員音楽コンサート 16-17P
- ◆ 保育方法演習H フィールドワーク (田中 葵) 17-18P
- ◆ New Face! 柴田 大輔 先生 18P
- ◆ 附属幼稚園夕涼み会のお手伝い (片川 智子) 19P

特集 保育者の学び合い ～めいトーク保育講座2013ご報告～

記：片川 智子



去る、6月29日（土）に、めいトーク保育講座2013を実施しました。

『月歩学歩』5月号でご覧になられた方もいらっしゃるかと思いますが、めいトーク保育講座とは、主に千葉県内の保育関係者を対象とした講座で、保育現場で働く多くの先生方と共に、保育に関わる様々なテーマについて学び合う機会となっています。

今年度は「実践に学び、実践で育つ」を大テーマに、幼稚園・保育園に関する「保育の部」と施設に関する

「施設の部」の2本立てで展開し、118名が参加され（内4名は学生です！）、丸一日かけて学び合いました。

「施設の部」では、「人を育て、人が育つ職場とは」をテーマに、汐田千恵子先生（母里子ネット代表理事）と加藤次郎先生（本学非常勤講師）の対談を基調に、午後は話題提供とラウンドディスカッションを行い、じっくりと語り合う場となりました。

- ・自分も育ちながら利用者さんも育てる、簡単なようでとても大変なことだと思う。利用者さんと関わりながら学んでいくことがとても多いと思うので、とてもいい意見交換だった。
- ・就職して1年が経過し、仕事にも少しずつ慣れてきた中で、悩みに向き合おうとしなかったり、忙しいと理由をつけて考えることをしなかった

自分がいました。今日施設長の方々の話を聞く中で、本当に大切なこと、考えなければいけないことをもう一度自分の中で考え、成長できるよう努力したいと思えました。また自分も発言することで、自分の気持ちを改めて考え、自分の仕事の仕方について考えようと思います。

などの感想が寄せられました。

「保育の部」の展開では、今年度は大きな変化がありました。午前には本学附属幼稚園での公開保育を行ったことです。公開保育とは、文字通り保育を公開することで、100名近くの参加者が、幼稚園の保育を見学しました。この見学を基に、午後は5つのグループに分かれて協議を行いました。最後には附属幼稚園の研修の講師である青木久子先生に、これまでの附属幼稚園での研修を踏まえてご講演いただきました。子どもの教育とは何か、子どもが自ら育つための援助、保育に論理的視点をもつこと等について、公開保育での具体的な場面を挙げながらお話しくださいました。

さて、上述のグループに分かれての協議（分科会）について少し詳しく触れたいと思います。協議は以下の5つのテーマ別に行われました。このテーマは、附属幼稚園の先生方が日々実践される中から挙げられた多くの課題から決まったものです。

- 1 子どもの経験と育ちがより豊かになるために - 保育の質の向上
- 2 子どもの一人ひとりの育ちを理解するための家庭との連携について
- 3 “見守る”援助とは。その実践と難しさ
- 4 今ある環境を実践に生かすために
- 5 卒園児と、保護者と、共に生活を作り出せるような場所になるために、今日の保育をどう展開するか - とくに、あねきとあにきと、おやじが集える場所に

学生の皆さんは、このテーマを見て、何となくイメージがつくものもあるのではないのでしょうか。または、実習の振り返り等で実際

に話し合ったテーマもあるかもしれませんが。

各分科会は、本学教員のコーディネートのもと、各テーマに関心をもたれた参加者が集い協議を行いました。どの分科会も、お互いにご自身の実践を踏まえての意見交換をし、悩みを共有したり、実践に生かすヒントを得られる協議になったようでした。

ここでは、ほんの一部ですが、第3分科会「“見守る”援助とは。その実践と難しさ」での協議の様子をご紹介します。

- ・ 附属幼稚園の保育では、子どもたちが自由に生き生きと遊んでいるように見えた。私は、子どもが自分で遊んでいけるための環境づくりが課題。“見守る”ということを考えた時に、保育者がいないと遊べない？と思うこともあり、保育者がやるべき部分と、子どもが自ら動くための援助の見極めに難しさを感じている。
- ・ 5歳児の担任をしているが、「子どもたちだけで話し合っしてほしい」と願いながらも入りすぎてル

ールを伝えすぎてしまうことがあり、その見極めが難しいと感じる。

- ・ 私は、総合遊具だけで遊ぶなど、ルールを決めすぎてしまっていたように思う。だから、子どもが何でも保育者に聞くようになってしまっているのかもしれない。
- ・ どこまで見守るかは子どもにもよる。声を掛けたいけれどももう少し待ってみよう、ということもある。その子を理解しながらタイミングを見極める。けれど、その時のその子のことを読み取れない時には、まずその子の遊びの世界に自分が入ってみるということも大切にしたいと考えている。
- ・ その子が何をしようとしているのか、何をするのか、まずは面白がって見てみる、ということも見方の一つ。
- ・ 子どもによって、子どもとの関係によって見守り方は違う。今日の公開保育でも子どもを読み取れなくてどこまで援助しようか迷う場面もあった。今週末にお泊り保育

があるが、子どもが生活を展開していくのをどこまで見守れるか、待てるか悩んでいる。

・私も今週末にお泊り保育がある。子どもたちが主体的に進められるようにと考えているが、同じくどこまで見守れるか、待てるか悩んでいる。「ご飯の時間だから」と言ってしまえば楽だけど、子どものためにはならないと思う。自分に待つ余裕やゆとりが必要。

・・・この後も常に見られている子どもの感覚、見ていないことと見ないふりをすること、記録のことなど、様々な視点から“見守る”ということについて考え合いました。

学生の皆さんは、中身は違ってもここで紹介したような話し合いを授業などで経験したことがあるはずです。保育者になってもこの学びは続きます。今は保育者になるための学びの最中ですが、保育者になれば学びが終わるわけではなく、繰り返し繰り返し目の前の子どもとのかかわりを一つ一つ考え続けながら保育者としての学びを深めていきます。

一日を通して、これが保育者の専門

性の一つなのだと改めて考えさせられました。

最後に。100名近くの参加者が見学するという公開保育は、幼稚園の先生方にとってとても大変なことです。幼稚園では、研修等で公開保育をされることももちろんありますが、本講座で公開保育を行うのは初めての試みであり、附属幼稚園の先生方と話し合いながら準備を進めてきました。同じ敷地内にありながら、実際に協同する機会は多くはありませんでしたので、今後の連携の一步としても大きな出来事でした。このような連携は、本学の教育内容をより豊かにすることに繋がるからです。附属幼稚園の多大なご尽力に感謝するとともに、短大の教員としては、この一步を学生の学びに結びつけていかなければと思っています。



キャンパス・ライフ

教育実習IIを終えて

～現場・卒業生とのつながりを改めて意識する～

記：石井 章仁

実習時に教員は、必ず園を訪れ、訪問指導を行う。その際に実習生の実習中の姿を垣間見たり、園と情報交換をしたり、課題等がみられれば共に考える。実習生の「指導」とはいえ、不安を訴える実習生の話を聴くことも多い。そのため、我々は、学生をよく知る教員（普段ゼミ等で担当する）を実習生に割り当てている。そして、直近の卒業生と訪問する教員との在学中の関係も考慮している。

今回、“実習”として何をどう振り返ろうかという時に、真っ先に思い出されたことは、現場で実習生を指導して下さった“卒業生”の姿だった。本来ここでは、担当者として、実習生の学びの生々しい姿を書くべきだが、卒業生たちが現場で育てられ、実習生を育ててくれている実感を得ることができた実習でもあったため、その姿を中心に描いていきたい。

□卒業生のクラスで実習し、その“働く姿”にあこがれを抱く

実習生Aさんの実習園には、2年前の卒業生Yさんがおり、私が伺うことになった。在学中のYさんは、1年次「保育内容演習」で私と1年間、約20名の仲間たちと共に学び合った。月1回「教育実習」を行い、レポートを書き、毎週金曜日に1日かけて約20人の仲間とともに1年間実習の振り返りを中心に学んだのだ。

Yさんは、はじめの頃は表面的な記述や子どもとのかかわりの記述が多くあったが、後半にかけてとても伸びた印象があった。今でも記憶に残っているのは、彼女に虫を見せてくる子どもとのエピソードである。その子は、彼女にしきりに虫を触ってと迫ってきた。虫が苦手なYさんは、その子に対して、はじめは「私の嫌がることを喜んでする」と思っていた。Yさんは、翌月の実習の時に、嫌がることをして

喜んでいるのとは違うことによく気づいた。よく考えると、彼は自分が好きな虫を大好きな“お姉さん保育者”にも触って欲しかった、その喜びを共有したかったのではないかということに気づいたのである。そして、その子の気持ちに近づけたことを1年間の学び（最も印象に残るエピソード）としてレポートにまとめた。

Yさんは、2年次の教育実習で実習を行った園に就職した。幼稚園に就職してわずか2年目ではあるが、園では、実習生の受け入れの担当を任されている。事務室の掲示板には、彼女の手書きの実習生の受け入れに関する書類があり、丁寧に書かれた文字からも、彼女の熱意と仕事の質が伝わった。

実習生Aさんは、主にYさんのクラスで実習を行わせていただいた。Aさんは、そんなYさんからの言葉かけに勇気づけられたり、時に反省したりしながら、3週間で過ごすうち、次第にYさんの姿にあこがれを抱き、終には幼稚園で働きたいと思うようにまでなった。実習生Aさんの生き生きした姿は、担当教員としてうれしいのであるが、そのように実習生を育てることが

できるYさんの成長した姿を見てさらに喜びを感じた。Yさんはきっと子どもにもそう接し、そう育てているのであろう。子どもと共に門まで見送ってくれたYさんの姿を見てそう思えた。

□実習記録の指導から感じる卒業生の成長

Kさんは、実習をきっかけに園で働きたいと強く思うようになり、縁があり就職した。Kさんも前述のYさんと同じ学年であり、1年間同じ保育内容演習のグループで、共に実習を行い、共に振り返った仲間である。私はKさんの園で実習をしている実習生の訪問指導の担当ではなかった。実習3日目くらいにKさんから直接お電話をいただいた。その時にKさんは、実習生のことや自分の指導の迷い、エピソード記録について、実習生にどう伝えればよいのかなど、Kさんの思いを聴き、短い時間ではあったが意見交換することができた。何より実習生のことがきっかけで話ができ、感謝するとともに、通じ合っているような気持ちにもなった。

Kさんの在学中、上記保育内容演習や保育実習の授業等で、エピソード記

録について多く指導した。彼女のエピソードはとても“薄味”で、日によって質と量にムラがあった。子どもの言動について、「なぜそうなのか、なぜそう考えるのか」という考察が少なかった。しかし、2年次の実習指導の際に、これまで最も印象に残るエピソードを書いた時（Kさんは幼稚園での実習でのエピソードを書いたが）、そこには、しっかりとした考察が書かれていた。それほど彼女にとって実習園は“良かった”のだと言った。

Kさんは、今年の2月、卒業後1年目の卒業生の集いに1年間かけて書いたクラスだよりを持ってきて見せてくれた。手書きで書かれた1枚1枚は、手作り感のあふれるお便りであった。クラスの全ての子どもを観ており、全ての子どもが登場していた。月に何度も書いているため、書くうちに段々上手くなっているようだった。彼女もきっとそう自己評価していたのであろう。だからこそ1年間の“成果”として持ってきたのだった。

今回、Kさんのクラスに実習生が入ったのは、初日と2日目の2日間であった。Kさんは、実習生のノートをこ

まめに見てくれていた。表面的で簡略な実習生の記録に対して、ところどころに「なぜそう思ったのでしょうか？」「ここで保育者がなぜそう言ったのか考えてみてください」「（子どもが）なぜ他の組の子と食べたのでしょうか」「保育者の意見ではなく自分の考えを書きましょう」など、一つひとつの出来事にコメントが添えられていた。記録に付けられた付箋の量から察すると、おそらく2時間くらいかけて見ていただいているようであった（Kさんは1時間も見ていません！と謙遜していましたが）。彼女もまだ2年目である。自分のクラス運営も精一杯の状況であるはずにもかかわらず、これだけ実習生を見てくれていることに驚いた。

そして何より驚いたのは、Kさんのコメントのほとんどが、きっと私もそう書くであろうというものであったことである。実習生に対して、同じことを考え、言いたかったことの全てを書いてくれているとも思えた。また、実習生に分かるように別紙に「エピソード記録とは」と、ポイントをいくつかまとめて渡して下さった。そこには、在学中から卒業後に学んだ、彼女なりのエピソードの記述の方法が書かれて

いた。彼女が在学中の学びを振り返りながら、そこに現場での学びを加えている証拠でもあった。

このように、実習記録の指導の様子から、この2年間のKさんの「伸び」を感じることができた。そしてそのように育てて下さっている現場に感謝の念を抱いた。

今回、上記のケースだけでなく、経験年数の少ない若い保育者が、実習生の受け入れを担当して下さっている例は少なくなかった。特に「後輩が実習に来る」からということで指導を受けているケースもあった。経験年数の浅い保育者が、日常業務に加えて指導までできるのかと疑問を持つ方もいるだろうが、人を育てることで自分が育つ

ことを考えるならば、実習指導は有意義な「内部研修の場」「OJTの場」として位置付けて考えることができるのではないだろうか。なぜならば、今回の事例のように、実習生だけでなく、実習指導をすることは、日常の“姿”や“指導”、“指導した記録”に、その人の価値観や学びが出てくるからである。

短大で養成した保育者が社会へ巣立つ。その巣立った先で、これから巣立つようとする実習生を育てる側に立つ。その循環ができていることこそが短大にとって、この上ない喜びである。今後も、こうした循環をつないでいけるように、担当として最大限の力を注いでいきたい。

保育内容演習 前期最後の光景



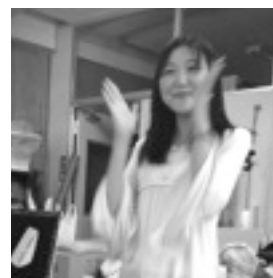
▲ 短大中庭にて、BBQをしながら前期を振り返っている様子...



あそび技能演習

今年度の新しい取り組みについて

記：池谷 潤子



1年生の「あそび基礎演習」に続く、保育技能の習得を目的とする2年生の前期科目「あそび技能演習」では、今年度、新しい取り組みを行いました。従来のように5つの専門コースを開講するだけでなく、前期15回の授業のうち、初めの4回は2年生をグループに分けてローテーションを組むことで、各先生方が専門としている内容をすべての学生が一通り体験できるようにしました。

このような取り組みをすることになった経緯には、6月に行われる幼稚園教育実習（3週間）で欠かせない保育技術（手遊び、絵本・紙芝居、ダンス・ゲーム、音楽表現遊び、製作、パネルシアターなど）について、実践的な技能や知識が整理されないまま学生が実習に出ている

のではないか、という昨年度の反省があったからです。そのため、各ローテーションの授業では実習で必要となる実践的な保育技能の基礎について学び、指導案を書くことまでを目に見える形で確認できる「課題シート」を作り、課題達成の進捗を教員がチェックできるようにしました。

今回の取り組みは、学生自身が毎時間授業で学んだことを記録し、宿題を確認するためのツールとして、また、実習に備えての自己課題を明確にするために役立ったように思います。来年度は、教育実習指導の授業との連携をさらに深めて、さらに使いやすい「課題シート」を作成し、実施できればと考えています。



お話を楽しもう

山田 典子

今年度は、12名でスタートしました。4月に聞いた絵本概論をもとに、毎週絵本の読み聞かせを5～6冊、手遊びや軍手人形遊びに加え、講師によるお話（ストーリーテリング）を聞くという、全員が参加する形の準備をすすめています。

絵本や手遊びなど、6月の幼稚園実習でかなり実践できたという声が聞かれました。後半はこれまで学んだ事をグループに分かれ、近くの保育所で2歳児～5歳児を対象に実践するというプログラムの他に、いよいよお話を語るという課題を実践することになります。一つのお話を語るということは、聞いていると簡単そうに思えるのですが、実際自分が語る側に立ってみると、お話がなかなか頭の中に入らず、四苦八苦する姿をよく見受けれます。

でもこの苦労は保育者としての財産を増やす、いわば“産みの苦しみ”ともいべきものです。子どもたちの食い入るような瞳、お話を楽しむ姿を糧に、保育者としての財産を一つでも、二つでも増やしてほしいと願っています。

音・リズム・からだであそぶ

阿部 友理

昨年度より引き続きあそび技能の授業を担当し、毎週学生からパワーをもらいながら、音楽表現活動を楽しんで行ってきました。

今年度は受講生が8名と少人数のため、一人一人の考えを聞きながら、皆で討論する時間を多くもつことができ、わからないこと、できないことを明確にし、「これだったら私にもできる、がんばれること」を授業で取り上げられるよう心がけてきました。

前半の授業では、音楽表現遊び（季節の歌・リズム遊び・楽器遊び）、指導案作成を中心に取り組みました。年齢に応じた保育内容の検討→指導案作成→実習保育のシミュレーションに至るまで実習前に準備を行ったことで、事後指導のレポートでは、具体的な反省や課題が記述されていました。「子どもたちの前だと緊張して、指導案通りにできなかった」との反省が多く、幼児への言葉かけの難しさがあげられていました。

後半の授業では、学園祭で発表する音楽劇の準備を行う中で、幼児の劇遊びについて学びました。さて、どんな発表を皆さんにご披露できますでしょうか…。

まずは、表現活動を自らが楽しみ、自由な発想でのびのび表現できる保育者を目指してほしいと願っています。

感じて、遊ぶ。つくって、遊ぶ。

池谷 潤子

私が担当しているコース「感じて、遊ぶ。つくって、遊ぶ。」では、30名弱の学生たちがいます。

実習前には、手遊び30個、ミュージックパネルの製作と上演、3人1組での指導案作成と検討という3つの柱で行ってきました。手遊びでは、あまり知られていないものを1人1つ探してみることを課題にしました。

また、ケロポンズの増田裕子さんが考案したミュージックパネル（シアター）では、私も思いつかないようなアイデアで楽しいシアターを製作した学生が数多くいて、実際に幼稚園実習で子どもたちや担任の先生方と楽しんで演じることができました！との報告も受けました。

指導案も同様で、互いに学び合った成果を活かすことができたとの意見が多く聞かれたので、引き続き、8月の保育実習に向けてミュージックパネルの製作も続けていくことになりました。

実習後の授業では、絵本を題材にした粘土遊び、パラフィン紙の星づくり、切り紙による花火（紙芝居製作）などを通して、学生のユーモアを引き出した造形活動や、本当に美しいもの（光と影）に触れる経験をしていきたいと考えています。



体を育てるあそび

益子 美土里

私は現在、保育園や地域のサークルでキッドビクスのインストラクターをしています。その経験から、保育の現場に出て行く皆さんの役に立つように、この授業では実際に私が行っているキッドビクスや、様々な運動あそびを取り上げています。

1年生の体育の授業でもキッドビクスを少し経験してもらっていますが、2年生になってからは、実際に子どもの前に立って指導ができるようになってほしいと思って授業をしています。

そのため6月の幼稚園実習の前に、実際に近くの保育園に行き、学生達が子どもの前に立つ経験をしてから実習に行くように授業を組んでいます。

保育園に実習に行くと、普段の授業では見られない学生の顔が見られ、やはり子どもを相手にする仕事を目指しているのだと感じます。学生自身も自分に自信をつけたり、自分の力がどれくらいなのかに気づくことができるようです。

さて、今年度のあそび技能演習の授業も残すところあとわずかになりました。今は課題として「音楽を使ったあそびの指導ができること」と「オリジナルのあそびを作る」に学生は取り組んでいます。今回の課題をこなすことをスタートとして、これから自分で目の前の子ども達にあったあそびを展開して行ってほしいと思います。

スクールラボで技を増やしてみよう

深谷 ベルタ

31教室（通称“造形教室”）にミシンや電気糸鋸の音に混じり、学生達の楽しいしゃべり声が飛び交い、6月の実習から学校に復活した2年生20数名が、賑やかな時間を過ごしているのです。まさに同時多発的にいろいろなモノを作り、小さな工房と言った感じです。

実習までは全員が少なくとも2セットのパネルシアターを作り上げました。数例を除いて実習中の保育現場でも使い、定番では無い内容で、新鮮さもあり、現場ではけっこうよい評判を受けてきたと報告しています。

今年度からこの“工房”（勝手に“スクールラボ”と呼んでおりますが）で

は、担当教員のかねてからの希望に沿って、仕事の負担が大きく、保育教材を自分たちで作る余裕がなかなかもてなくなってしまう保育現場のために、学生達の手で作られる“モノづくり”を再度提案しました。そして、ガイダンスの時に学生達に対してそのように説明すると、20数名が協力したいと手を上げてくれました。具体的には、今年の4月にスタートした「明德そでの保育園」に、保育者達や子ども達に使えるモノを作りたいということです。

でも、実習から学校に復活した学生達の気持ちは、少し違った方向に向かったようです。協力したい気持ちのある学生もいるなかで、やはり自分の今後の都合を最優先している学生が多いのが現状です。そのようになったことには私の責任もありますが。実習帰りの時に、この工房のねらいをもう一度伝えたものの、学生自身の意向も聞いてしまい、“工房のねらい”（強いて言えば学生自身がこの授業をそもそも履修したはずの理由）を強制しませんでした。つまり、換言すれば、私自身も学生の意向に負けてしまい、譲ってしまったわけです。学生自身が本当に取り組んでみたいことをすれば一番いいだろう、と。

さて、現在作っているモノはというと、引き続きパネルシアターに取り組んでいる人が4-5名。絵本からコツコツと紙芝居を作っている学生は1名。エプロンシアターを作ってみたいという学生は当初は6名いましたが、お金も時間も手間もかかると分かると5名が断念し、作っているのは1名のみです。1名はとてもセンス（デザイン）のよいままごと用のおもちゃをフェルトで作っています。おもちゃに思えないほど本物によく似たリンゴやバナナ等です。2コマ（3時間）かけてできるのは1個です。これも器用さの他、根気のいる仕事です。折り紙図鑑を作っている学生もいます。幼児でもできる折り紙で編集しています。これも1回で1-2ページしかできません。粘土でのんびりとままごと用の食べ物を作っている人もいます。切り紙が気に入って、再度挑戦したい人もいます。今年度初めて自分でデザインした「動物のはめこみパズル」を作っている学生（2名）もいて、これらのパズルは保育園にプレゼントされる予定です。また、今年初めてできた「大工部」にも参加している女子が、かつて私が友達から譲り受けた角材で積み木を組み立てています。他には保育園に差し上げ

るつもりで、パネルシアターの舞台を立てるイーゼルを修理したり、ダンボールを板状に張り合わせ、糸鋸で切り抜いて、おもちゃになる車を作ったり、ビー玉コロガシのおもちゃを作ったり、さらに人形作りに挑戦したり（各1名）、消しゴムスタンプにトライしたり（4名）する学生もいます。そして1名は季節に合わせたテーマでいくつかのモビールを作っています。ざっと数えて14-15種類のモノにトライしているので、賑やかになるのは当然です。実は学生の傍らで私も保育園用のモノを作りたいと密かに思っていたのですが...無理でした。

側で様子を見守っている担当者から言えば、「人のために作る」学生はなかなか“がんばりや”です。実習後にこのような作業に使える時間はとても短く、わずか1ヶ月位しかありません。ですから真剣に取り組まないと、時間

内に作業が終わらない（モノが完成しない）ので、授業の合間に、あるいは1日の授業が終了した後に時間を都合して、31教室に来て作業を続けているのです。「人のために作る」なら、そのようなやりくりもできるということでしょうか？

でも、やはりと言うか、「自分のために作る」（保育者になってから使いたい気持ちで）学生は決してそこまでしませんね。「あそび技能」がある時間にだけ“緩やかに取り組んでいる”ように見えてしまっています。そのような学生も、道具や素材がないために、普段はできない、あるいは今まで挑戦できなかったことに取り組んでみて、何かしらのことを学んでいるとは思いますが...“力加減”にどうしても差がついてしまうような気がします。気のせいでしょうか？ 残すところ後2日。



「音楽表現とピアノI」教職員音楽コンサート



7月16日（火）、「音楽表現とピアノI」の授業内で、教職員による音楽コンサートが開かれました。

【松山 楓】

11弦ギターを初めてみた。あれだけたくさんおさえるところがあるのにスラスラと弾いていたから、やっぱりすごいなと思った。連弾のジブリやディズニーのメドレーはとても綺麗で、ずっと聞いていたいと思った。風になり隊（編注*プログラム4）がとても楽しそうで、見ていて楽しかった。

先生方の発表を見て、自信を持って楽しそうにしている、私も子どもたちの前で楽しくできるようになりたいから、もっと練習して自信を持って弾けるように頑張ろうと思った。

【杉本 渉】

先日行われたコンサート、素晴らしかったです。音楽の授業の時に聞いていた明石先生の11弦ギターを見られてすごく感動しました。田中先生のダンスも素敵でした。創作ダンス（編注*コンテンポラリーダンス）というのを見たのは初めてだったので、すごく新鮮で面白かったです。

1. 落葉松	金子陽子（ソプラノ） 福中琴子（ピアノ）
2. ディズニー・メドレー	福中琴子・井出香里（ピアノ）
3. 帰っておいで、優しい愛を呼んでいる/サリーガーデン	田中純子（ソプラノ） 明石現（11弦ギター）
4. 青空	鶴田真二（歌、ギター） 伊藤恵里子（ピアノ） 田中葵（パーカッション）
5. 九十九里浜/結婚/子守唄	菅谷君夫（バリトン） 福中琴子（ピアノ）
6. 証城寺の狸囃子	深谷ベルタ（口琴）
7. われは海の子/汽車ポッポ	田中純子・金子陽子（ソプラノ） 福中琴子（ピアノ）
8. 「ニュー・シネマ・パラダイス」より	片川智子（歌） 小出一豪（ピアノ） 明石現（6弦ギター）
9. ワルツ（メリー・ウィドーより）	菅谷君夫（バリトン） 田中純子（ソプラノ） 福中琴子（ピアノ）
10. プレリユード	田中葵（ダンス） 明石現（11弦ギター）
11. ジブリ・メドレー	井出香里・福中琴子（ピアノ）
12. この星に生まれて	1年生全員（合唱）

今回のコンサートは先生方がいつもと違う顔をしていてカッコ良かったです。また機会があるならコンサートを聞きたいなと思いました。ま

た、楽器のできる学生を集めて、学生と先生との合同コンサートも面白いんじゃないかなとも思いました。

**「近藤良平・コンドルズ、池袋大作戦!! “にゅ～盆踊り”」への参加
保育方法演習H フィールドワーク**

田中 葵

7月15日（月・祝）、保育方法演習H（田中ゼミ）は、池袋西口公園で開催された「にゅ～盆踊り」に参加してきました。

この「にゅ～盆踊り」は、ダンスカンパニー「コンドルズ」（学ラン姿がトレードマーク）主宰、“アイーダアイーダ”、“てっぱん”など多数の振付で知られる振付家・ダンサーの近藤良平氏によるオリジナル盆踊りです。池袋にある豊島区芸術交流センター“あうるすぽっと”が、地域に根ざした劇場を目指し、2008年から始められた企画です。「にゅ～盆踊り」以外にも、地元の婦人会の方々が教えて下さる炭坑節や東京音頭も踊ります。

屋台がある、櫓がある、音楽がある、そこに老若男女のべ3500人が集まり踊る。その輪に、私たちも入りました。（参考URL: <http://newbonodori.info/#about>）

【渡部 梨乃】

最初「盆踊り」と聞いた時、正直に言えば、大人しくてつまらないだろうな、というイメージがありました。しかし、授業で映像を見た時、そのイメージが変わりました。走ったり跳んだりといろいろな動きがあり、とても楽しそうでした。一方で、踊りの途中で知らない人と2人組になって踊るという事にとっても不安を感じました。（中略）



当日、会場に着いた時はちょうど盆踊りが始まる頃で、踊りがよくわかっていないので見ていようかと思ったのですが、近くにいた方にほとんど強制的に入れられ、踊ることになりました。(中略)知らない人と踊る事に恥ずかしさを感じていましたが、踊っている内に恥ずかしさは消え、他の人たちが踊っていると、私も踊りたい！と自然に思うようになっていました。

【小林夢子】

(前略)「にゅ〜盆踊り」では、見ている時と、実際に中に入って踊っている時の楽しさの違いに気づきました。1歩中に入るか入らないかで、同じ“踊る”でも、周りからのエネルギーや自然に体が動く感覚などに違いがあ

りました。どっちも楽しいですが、近藤さんの言葉のように、せっかく踊るなら、周りを巻き込む踊りが楽しいと思います。「にゅ〜盆踊り」は、向かい合わせでペアになって踊るので、相手がどのように動いてくるか、違いがありました。思いっきり動きにする人もいれば、相手にあわせようとする人もいました。相手を感じながら踊ることが好きだと感じました。(中略)

新しくしていかないと若い人が集まらないというのも寂しいなと感じました。私の地元のお祭りの踊りはずっと変わっていません。でも、若い人たちがメインに楽しんでいます。昔のものを大切に残しつつ、新しい人たちを呼ぶ工夫が必要であり、またそこが難しい部分なのかと思います。(後略)

New Face!

しばた だいすけ
柴田 大輔



学生時代はずっと学校教育の研究をしていましたが、ふと気が付けば卒業してもう15年！しばらく教育とは離れた仕事をしてきましたが、明德に来て皆さんのハツラツとした楽しそうな様子を見ているとやっぱり教育って楽しいなと改めて実感しています。一般企業で働いている間に得た経験を生かしつつ、皆さんと一緒に色々体験し、学んで行きたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

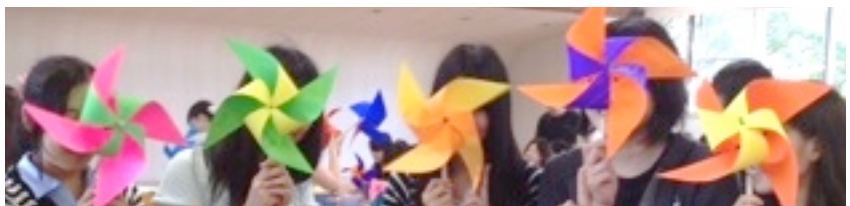
附属幼稚園夕涼み会のお手伝い

記：片川 智子

7月20日（土）、附属幼稚園の夕涼み会が行われました。たくさんの浴衣姿の子どもたち、地域の方々と賑わう広々とした園庭に、ゲームやワークショップなどのコーナーもあり、多くの子どもたちが集まっていました。

...実は、これらのコーナーは学生が企画運営したもの！4月から月1回附属幼稚園で実習をさせていただいている1年生が、子どもたちが楽しめるものは何かと考え、準備してきたものです。附属幼稚園の夕涼み会のねらい「地域の歴史に触れる」から歴史を調べ、海が近く貝塚があることを知り、貝を使ったブレスレットやストラップの製作コーナー、魚釣りコーナー、伝承遊びコーナー、風鈴作りコーナー、的当て・ボール投げコーナーの5つを出店しました。夕涼み会には数百人が参加しますから、その準備も大変です。附属幼稚園の先生方と打ち合わせを重ねながら、授業の合間に、放課後に、着々と準備をしてきました。当日は、必死に切り盛りする学生の横で、夢中に楽しむ子どもの姿！これまでの頑張りに対する一番のお返しだったのではないのでしょうか。私はただただ参加させてもらいましたが...楽しかった！





8・9月の予定

8/3+10+21+24 9/7+21

公開授業

8/3+8+28

オープンキャンパス

8/7～8/9

研修生県外保育FW(北海道/帯広)

8/17、9/21

スターバックスお話しライブ

8/17～8/19

東北スタディーツアー

8/22～27

教員免許状更新講習

8/23～9/7

保育実習Ⅱ・Ⅲ(2年生)

8/27、9/27

研修生スクーリング

9/15～24

わくわく体験フィールドワーク

9/25～26

乳児保育ボランティア(1年生)

発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel:043-265-1613

Fax:043-265-1627

e-mail:

tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:[http://](http://www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html)

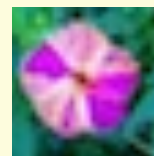
www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html

編集

田中 葵

深谷 ベルタ

鶴田 真二



読者の皆様へ、『月歩学歩』に対するご意見、ご感想をメールにてお寄せ下さい。

▲本表紙の色鮮やかな輪つなぎもこの風車も、あそび基礎演習の合同授業で作られたもの。学園祭でも飾られました。詳しくは次号をお楽しみに！

編集後記

今月の『月歩学歩』はいかがでしたか？2年生たちは6月の実習から学校に戻り、振り返りが終わるや否や学園祭の準備を進める傍ら、前期で終了する「あそび技能」で着手したことの仕上げに、と忙しい日々を過ごしたと思います。

1年生も7月前半から学園祭に向けての準備を始めました。今年度は学園祭の準備を「学び合いのためのプログラム」の中に組み込み、学年を超えて協力し、少しは心の余裕と関わり合いの機会を持って準備できるようにしました。(前期が終了する直前にその振り返りもできたようです。)

6月の実習振り返りを報告した石井先生の報告を読むと分かるように、出来事の最中、私達の気持ちは揺れ動き、物事を冷静に受け止めるのに少し時間(そして経験も)が必要で、「反省的な意識」が育つためには、「先輩の姿」に触れる機会も欠かせません。

明短に限ったことではありませんが、こう言った姿勢を育む上で今月の『月歩学歩』も少しお役に立てばと願っています。(深谷)